

1. はじめに

矢作川下流域の鹿乗川左岸の沖積地に立地する下懸遺跡から出土した炭化材について、樹種同定を行なった。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、土坑である 201SK から出土した炭化材 3 点である。放射性炭素年代測定の結果、試料 No. 2 は弥生時代後期前半、試料 No. 1 と 3 は弥生時代後期に相当する暦年代を示した。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柁目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、広葉樹のクリ 1 分類群と、単子葉のイネ科 1 分類群の、計 2 分類群がみられた。同定結果を表 1 に示す。

表1 下懸遺跡出土炭化材の樹種同定結果

| 試料No. | 遺物No. | 調査区 | 遺構など | 樹種 | 年代測定番号 |
|-------|-------|-----|-------------|-----|-----------|
| 1 | 005 | 15 | 201SX サンプル土 | クリ | PLD-34704 |
| 2 | 006 | 15 | 201SX サンプル土 | クリ | PLD-34705 |
| 3 | 007 | 15 | 201SX サンプル土 | イネ科 | PLD-34706 |

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図版 1 1a-1c (No. 1)、2a-2c (No. 2)

年輪のはじめに大型の道管が 1~3 列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(2) イネ科 Gramineae 図版 1 3a (No. 3)

向軸側の原生木部、その左右の 2 個の後生木部、背軸側の篩部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の稈である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は比較的薄い。

イネ科は、タケ亜科やキビ亜科など 7 亜科がみられる単子葉植物であるが、対照標本が少なく、同定までには至っていない。

4. 考察

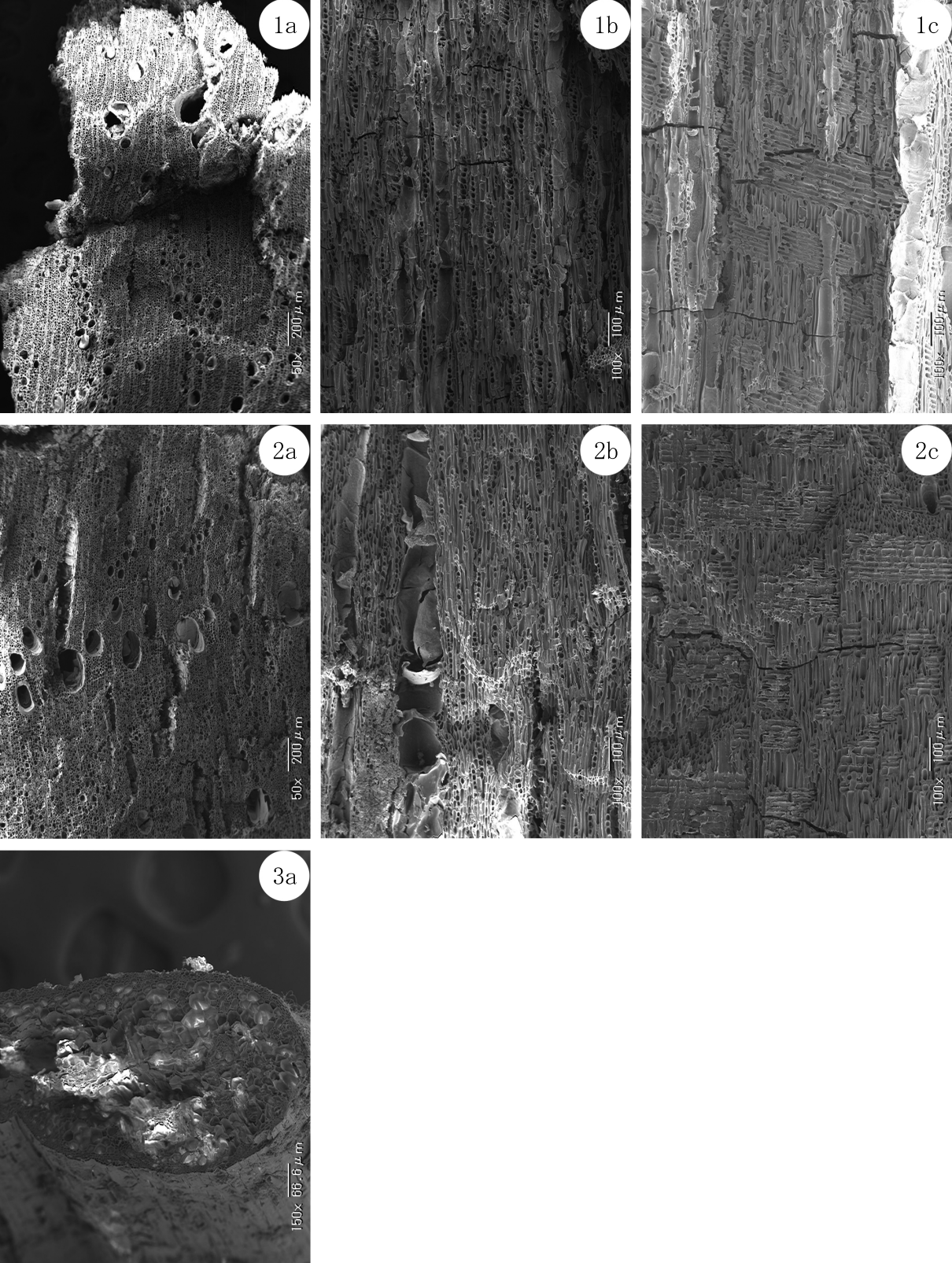
201SK から出土した炭化材は、クリとイネ科であった。いずれも用途不明である。クリは堅硬な樹種で、燃料材としては長時間燃焼し続けるという材質を持つ（伊東ほか, 2011）。愛知県の弥生時代

の樹種同定例の集成によれば、クリは板や杭としての出土例が多く、朝日遺跡では土坑から多く出土している（伊東・山田編，2012）。遺跡周辺に生育していたクリおよびイネ科が伐採利用されていたと考えられる。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社.

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—. 449p，海青社.



図版1 下懸遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. クリ (No. 1)、2a-2c. クリ (No. 2)、3a. イネ科 (No. 3)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面